

学問分野化するコミックス

トランスディシプリン
ウィスコンシン大学マディソン校における学界横断的なメロン・ワークショップ

アダム・L・カーン

小林翔 訳

はじめに

マンガ研究の分野だけでなくそれと関連するコミックス研究について、今回みなさんと議論を行える機会に感謝します。本発表の目的は、アメリカの主要大学でコミックス研究専攻を設計してきた主任としての私の経験を共有することですが、その際、研究や教育における作家の役割に特に注目します。現在は単にコミックス研究と称するこのプログラムは、2年強に渡るワークショップから出発しました。講演や会議、その他のイベントが、アンドリュー・メロン財団による出資の元、アメリカの公立大学の上位10校のうちの1つであるウィスコンシン大学マディソン校で開催されました。

発足時の主要な目的は次の4つでした。第1には校内の誰が、その教育や研究においてコミックスに関心を持っているかを計る、つまり地域のコミックス研究のコミュニティのあり様を調査することです。

第2に、コミックス研究のプログラムを作ることに對する関心を調べることです。

第3に、十分な関心が確認された場合、胎動しつつあるコミックス研究の分野において、「コミックスとは何か」という合意形成にさえ至っていない状況下で、コミックス研究のプログラムをどのように作るべきかを理解することです。言い換えれば、コミックスの学問分野化は可能かという問いに取り組むのです。

最後に、マンガをどのようにコミックス研究に適応させるかを、私自身理解したいと考えていました。

上記の問題に対しては次の回答にたどり着きました。大学教員としては、コミックス研究のプログラムを作る上で中心的役割を果たすのは、ビジネスマンでもサラリーマンでも『デイヴィッド・レターマン・ショー』のゲストでも幼稚園児でもなく、同僚の大学教員であると常に想定していました。しかし今回は、コミックス研究のプログラム設立の方法について、当惑するほど実用的な答えを提供したいと思います。それは単に、地域の人材を起用するという事です。その人材が研究者ではない人物であっても、コミックス研究がいかなる形を取るべきかを、地域のコミックス関係者の交流を通して決めていけばよいのです。

さて、コミックス研究がますます盛んになると思われるウィスコンシン大学マディソン校で、どのようにその結論に至ったのかについて述べさせて下さい。簡単にいえば、メロン・コミックス・ワークショップが成功と呼べる成果を取めたのは、私が「学界横断性 (Transdisciplinarity)」

と呼ぶ方法によるものです。以下では、「学界横断性」がどのように「学際性 (interdisciplinarity)」や「分野横断性 (crossdisciplinarity)」と異なるかについて、マディソン校における試みを具体例に説明させていただきます。

背景

2009年に私は、日本文学を教えていたハーバード大学からマディソン校に移籍しましたが、ここでは日本学科での教職に加え、マディソン現代美術館と提携する同大の視覚文化研究センターの所長を務めることになりました。本センターには約100人の大学教員が関わっていますが、重大なことに、コミックスとの繋がりが一切ありませんでした。

言うまでもなくコミックスは至る所で人々に人気です。しかし、アメリカのコミックス産業はニューヨークとサンフランシスコに集中しています。このような産業の中心地から離れた地域の校内でコミックスに関心を持つ人物、しかもコミックス産業の中心で活躍する人物が見つかるとは予想もしませんでした。マディソン市は『ザ・ニュー Yorker』誌による世界地図にさえ含まれていないのです。確かに、センターの教員にはコミックスに関心を持つ人は一人もいませんでした。

実際、表面上はマディソン校でコミックス研究のプログラムを立ち上げるというチャンスはほとんどありませんでした。まず、大学の図書館の書架にはコミックスがほとんどなく、しかもマンガは一切ありませんでした。オハイオ州立大学のビリー・アイルランド・カートゥーンミュージアムの30万冊を超えるオリジナルのカートゥーンや45,000冊の単行本、67,000ものシリーズ物を有するコレクションとは比較になりませんでした。当該ミュージアムはマンガに関しても素晴らしいコレクションを有しています。それはモーリーン・ドノヴァンの功績です。昨年春に定年を迎えたこの司書は、日本国外の他のどの図書館よりも遥かに先駆けて、1980年代からマンガを収集し始めました。結果として、2万を超える収蔵点数は欧米におけるマンガコレクションとしては最も大規模なものとなりました。それでも、30万点を収蔵する京都国際マンガミュージアムには及びませんが。

そして、コミックスに関心のあるマディソン校の教員は、視覚文化研究センターの外にさえほとんどいないように見えました。各学科の講義概要を検討した時、コミックス関連の科目は2つだけでした。その一つは、ロビン・ヴァレンザが担当する英米文学専攻でのグラフィック・ノベルについての講義で、もう一つは、メアリー・ラユーンが担当する比較文学専攻での世界のグラフィック・ノベルについての講義です。いずれもコミックスへの文学的なアプローチを採用していて、これらの科目は、アメリカにおけるコミックス研究専攻の一つの問題を意識させられます。つまり、アメリカの多くのコミックス研究専攻は、コミックス制作を学生に教える実技系の専攻、もしくは、主として文学や映画研究に依拠した文化研究の専攻であり、その稀有な例外の一つがニール・コーンの仕事だといえるでしょう。私はすぐに、マンガについての担当科目を加えましたが、本物のコミックス研究専攻を設立するための見通しは暗いものでした。また不運なことに、マンガについての関心を、私の担当科目の何百人かの学生の外へと広げる道のりも見当たりませんでした。元来、ウィスコンシン州には日本と縁のある企業がありません。ハワイやカリフォルニア、アナーバー・ミシガンやケンブリッジ (マサチューセッツ) などの大学では、日本との経済的・文化的な関係を背景に、マンガを含む日本を研究することを正当化する必要はありませんが、ウィスコンシン州のマディソン市のような場所には、日本文化的な文脈はほとんどないのです。唯一の主要な日本企業は、ミルウォーキーの市外地に位

1 <http://library.osu.edu/blogs/cartoons/2015/05/29/maureen-donovan-and-osuls-manga-collection-history/>

2 <http://www.kyotomm.jp/english/collection/>

置する醤油メーカーのキックマンです。キックマンは名目的な財政援助には十分協力的でしたが、当然ながら日本文化よりも微生物の培養に興味を持っています。

教員のマンガやコミックスに対する関心、図書館の所蔵資料、日本とのビジネス面での繋がりの欠落といった状況下で、アメリカにおける主要なコミックス研究専攻の一つを設立するために、あえて短所を長所に変え地元の人材を受け入れるという戦略を採りました。

メロン・コミックス・ワークショップ

メロン・コミックス・ワークショップは、アメリカの主要な慈善事業団体であるアンドリュー・メロン財団から運営資金を提供され、2013年9月から2015年6月にかけて開催されました。課題はコミックスの学問分野化でした。つまり、コミックスの実態に即したコミックス研究専攻をどのように築くか、そして、学生を惹きつけるのに十分明白であり、かつ、コミックスの将来を予想するのに十分な範囲のあるコミックス観を保ち続けるというものでした。

本ワークショップの目標

メロン・コミックス・ワークショップは、ウィスコンシン大学マディソン校内外の学生、研究者、作家、その他のコミックスに関心を持つさまざまな人々のコミュニティに、コミックス全般に対する問題を追究するための知的空間を提供しています。ここでいうコミックスとは、バンド・デシネやコミックス (comix)、コミックブック、コミック・ストリップ、グラフィック・ナラティブやグラフィック・ノベル、インフォグラフィック、マンガやマンホア、マンファ、政治漫画や社説漫画、アンダーグラウンド・コミックス、ウェブコミックス、絵本、フォトエッセイ等々の、画と字を絡み合わせる物語を指している。

本ワークショップの第一の目的は、広義のコミックス関係者を、いままさに立ち上がりつつあるコミックス研究という領域とそれが直面する知的・制度的・学術的挑戦に関する有意義な対話へと接続し、それによってウィスコンシン大学マディソン校でのコミックス研究専攻の可能性を推し量ることにあります。それゆえ、本ワークショップが追求する中心的な問題は、コミックス研究が学問分野化するための最良の方法をめぐった挑戦に帰結します。以下はその問いの一例です。

- 他の表現ジャンルやメディアに固有の領域が、その草創期において直面する陥穽を、コミックス研究はどのように避けうるだろうか。
- アニメーション、映画、文学やコンピュータゲームなどとの相互関係をどのように追求し、刺激とすることができるだろうか。
- そうした相互関係は、とりわけウェブコミックスの時代である現代において、コミックスという概念をどのように変えてきたのだろうか。
- コミックスがどのように定義づけられるか、あるいは誰によって定義づけられるかによって、何らかの差異が生じるのだろうか。
- 今まさに立ち上がりつつある本学問領域をどのように位置づけることができるだろうか？
- 既成の文学や芸術の正典及び学問分野に、コミックスはどのように関係付けられるだろうか。つまり、内在化し、または距離を取り、あるいは対抗するだろうか。
- (コンピュータゲームと同様に) コミックスの真に教育的な可能性は、どうすれば最大限に発揮できるだろうか。
- 一般的な読者や、危険に晒された若者とのコミュニケーションをとり、公衆衛生や安全についての重要な情報を広めるために、教育コミックスやインフォグラフィックスはどのように用いられればよいだろうか。

・コミックス創作は作家のメッセージを届けるだけでなく、こうした問題についての知的な理解を深めることにどのように貢献できるだろうか

本ワークショップでは様々なスピーカーを世界中から招いています。例えば、アメリカ文学の研究者であり、コミックスやグラフィック・ノベルにも精通するヒラリー・シュートを迎え、また『ザ・ニューヨーカー』誌のカートゥーン編集者であるロバート・マンコフには、クラウドソーシング方式でカートゥーンに見出しを付けるコンテストについて報告していただきました。さらに、ジュリア・クオとヘレン・ジョーのようなアジア系アメリカ人の女性作家や、すぐれたコミックス研究者であるケント・ウースター、ロイ・コック、キャロル・ティリー、中でも、オレゴン州ポートランド市におけるコミックス研究専攻を率いるベン・サウンダーズらを含む多くの人々に登壇していただきました。

こうした2年間の過程によって、私はコミックスに関心のある多くの人々を見つけることができました。衝撃だったのは、彼らの多くは当然教職員ではありませんが、コミックス産業に関わる人々にとって無視できない取り分がウィスコンシン州に実際に存在していると理解したことです。例えば、デニス・キッチンという出版人は、ミルウォーキーの郊外—といってもマディソンから1時間程の距離—に住んでいます。彼はアメリカにおけるアンダーグラウンド・コミックスの主要な出版社の一つである Kitchen Sink Press 社のオーナーで、ロバート・クラムとハーベイ・ペッカー、そしてマディソン校で講演を行ってくれたアート・シュピーゲルマンらと多くの偉大なアンダーグラウンド・コミックスを手がけてきました。

もう一人はコミックス・グル、ミルトン・グリエップです。元々ニューヨーク出身の彼は、サンフランシスコとニューヨークの事務所、そして家のあるマディソンとに生活を分割されています。グリエップの発行する『ICv2』誌は業界最大の産業情報誌であり、毎年1億5千万ドル、日本円では180億円程度を売り上げています。

また、コミックスへの関心を人知れず持っていた研究者にも出会いました。例えば、ポーラ・ニーデンソールです。彼女は表情の微細な表現についての研究に携わっており、それが基盤となったテレビ番組『Lie to Me』によって幅広く知られています。ポーラと『ニューヨーカー』誌のカートゥーン編集者マンコフは、マディソン校で開発したカートゥーンのイメージの膨大なデータセットを用いた、コミックスにおける表情表現の研究を共に行っています。

作家も見つかりました。例えば、労働問題を専門とするカートゥニストのマイク・コノパスキーです。コノパスキーと一緒にハワード・ジンのベストセラー本のグラフィック・ノベル化を行ったポール・バエレも忘れてはいけません。彼は、ブラウン大学で歴史を教え、数多くの本を出版していましたが、定年退職後、マディソン市に移ってきました。もう一人は、ラシーン在住のジョン・ポールセリーノです。彼の『Hospital Suite』は全米で大ベストセラーとなり、ナショナル・パブリック・ラジオや『ニューヨーク・タイムズ』誌等で取り上げられていました。

そして、『ザ・シンプソンズ』のマット・グレイニングの親友で、かつての『デイヴィッド・レターマン・ショー』の常連ゲストでもあった、多くの賞を受賞しているグラフィック・ノベル作家リンダ・バリーです。リンダが出版してきた優れたコミックスの中には『What it is』や『Ernie Pook's Comeek』、研究者を含む多くの人々にとって最良のイメージ論の一つと言える『What is an Image』、そして、『100 Demons』というグラフィック・ノベルがあります。このように、ロサンゼルスやオレゴン州のポートランドと異なり、ウィスコンシンは、必ずしも研究者からなるわけではありませんが、ニューヨークやサンフランシスコを除けば、コミックス研究の拠点としてもっとも重要な場所であることがわかります。

本発表の結びに移る前に、いくつかの理由から私の友人であるリンダ・バリーの話をもう一度しておきましょう。まず、今回私は、研究や学問における作家の役割について述べるように

依頼されてきたからです。そして、視覚文化研究センターの所長として、リンダの学術的な地位を準備するのに尽力してきたからです。現在、彼女はマディソン校の芸術部門及びそのディスカバリー・センターの助教授を務めています。リンダは、全国での公演と彼女の出版物で、私たちのコミックス研究専攻を幅広く知らせてくれました。彼女の担当するコミックス制作の科目について細かく記述した『Syllabus: Notes from an Accidental Professor』は先日、ウィスコンシン大学出版局から出版されました。さらに、リンダはマインドマップやその他の認識ツールとしてコミックスを用いる共同研究企画「Drawbridge」の立案者でもあります。この企画は幼稚園入園前の子供たちと、諸研究科の大学院生とでペアを組ませるといふ、素晴らしく独創的な発想に基づいています。

結びに

メロン・コミックス・ワークショップでの経験は、メディア研究や文学研究、美術史、視覚文化研究等々といった学問分野の専門性から、純粹にコミックスを定義づけようという試みから私を解放しました。端的に言えば、私は「学際的」モデルから「学界横断的」モデルへと移行しました。その二つを次のように区別できます。

「学際的 (interdisciplinary)」というのは、2つ以上の研究分野の参加によって特徴づけられる、学界内の分野融合的なものをさしているのに対し、「学界横断的 (transdisciplinary)」とは、学界内、つまり大学という制度内にとどまらず、その外に位置する作家、行政、子供たちによっても特徴づけられ、展望されます。すなわち、学者ではない人々の参加によって学問や学問分野の枠組を超えてゆくことです。

コミックスの学問分野化は、知的かつ芸術的な問題であると同時に、業務的、場合によって行政的でさえある問題です。大学の外部に出ない限り、コミックスとは何かについての答えを得ることはできないでしょう。そこで得られる答えは、私がこれまで想像してきたこととは非常に異なっていました。マディソン校のコミックス研究専攻から導かれた私たちの回答は、フリップブック・アニメーションやビッグ・データ、教育的なインフォグラフィックスに至るまでを研究対象に含むことに対して、十分に柔軟さを持てば良いということです。最後に、ウィスコンシン大学は話題に上げるほどにはマンガを所有していないので、日本財団などと協力してオンラインの閲覧システムを積極的に追求しています。今後ともよろしくお願ひします。